

# 政務活動視察報告書

報告者：三浦 康宏

視 察 日	平成29年10月3日（火）
視 察 内 容	史跡米子城跡保存活用計画について
視 察 者	山崎憲伸、加藤義幸、鈴木静男、杉浦久直、三浦康宏

## <米子市の概要>

米子市は県の最西端に位置し島根県に隣接。県西部地域の中心都市で、「山陰の商都」と呼ばれるなど古くから商業活動が盛ん。JR3線や中国横断道が通り、米子鬼太郎空港が置かれるなど山陰の交通の要衝。自然と都市機能が調和し、特に医療機関が充実。15年に経済産業省作成『生活コスト「見える化」システム』において、暮らしやすさ日本一と評価され、15年国勢調査では10年の前回調査より人口が1,000人増加した。15年10月策定の「米子がいな創生総合戦略」に基づき、人口減少・少子高齢化対策等の地方創生の取り組みを進めている。また16年スタートの第3次総合計画において、「生活充実都市・米子」の更なる進化を目指している。

面積：132.42 k m<sup>2</sup> 人口：149,313人



## <米子市 史跡米子城跡保存活用計画の経緯>

米子城は、戦国時代末期から江戸時代まで西伯耆支配の拠点城郭で、慶長7年(1602)頃完成したと言われており、松江城に先立つこと10年、山陰で他に先駆けて築かれた大小2つの天守を連ねる壮麗で本格的な近世初期の城郭であった。また江戸時代を通じ、伯耆の政治的、経済的な中心として存在し、当地方の歴史理解の上で欠かすことのできない貴重な存在であった。更に関連する文献・絵図史料も豊富に残され、戦国末期から近世初期の築城技術を知る上で重要であるとして、昭和52年4月には本丸、内膳丸、二の丸を市指定史跡とし、その後平成18年1月に同じ範囲で国指定史跡の指定を受け、現在に至る。しかしその姿は、明治期になり天守、門、櫓等の城郭を構成していた建造物や構築物が破却され、また近代以降の土地利用により、内堀は埋め立てられ、三の丸は商業施設の建設等により市街地化が進み、往時の姿は見られなくなっている。

昭和32年には都市公園(湊山公園)として都市計画決定され、それ以後は都市公園として整備されてきたが、文化財保護の取り組みとしては、この間、発掘調査や石垣修復工事、園路整備等を実施してきたが、いずれも部分的かつ短期的、応急的な対処にとどまり、文化財として史跡が有する価値の保存を図る整備としては十分とは言えないもので、文化財としての保存と活用の両立、史跡の価値を活かした事業のあり方を検討する必要性が生じていた。こうした状況の中、米子城跡の保存、活用、整備、運営・体制等に関する現状と課題の把握、これに基づく今後の対応の方向性、方策を明確にするため、保存活用計画の策定に取り組んだ。





### <米子市 史跡米子城跡保存活用計画の特色>

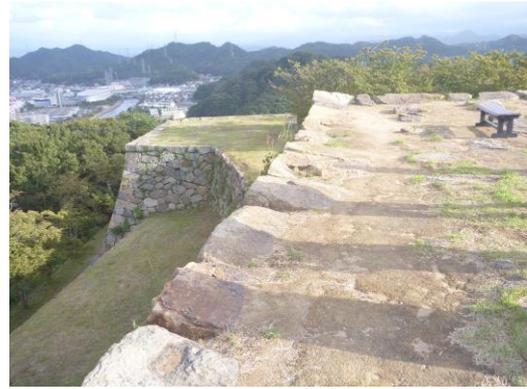
米子市は平成 20 年に整備基本構想案を作るも、史跡米子城跡に対する市民意識の低さと、合併後の財政難で整備はなかなか進まなかったが、平成 23 年 6 月議会での市長発言をきっかけに、「もっと知りたい米子城」のキャッチフレーズのもと、ソフト事業からその打開を図り、ツアーやウォークなどの企画を展開した。

また平成 21 年から 25 年には NPO 法人夢蔵プロジェクト、鳥取県建築士会主催、米子商工会議所青年部、米子市教育委員会協力で、石垣

のライトアップを行い、米子城跡を「米子の宝」として、市民に景観保全や景観形成の意義を持ってもらい、まちのにぎわいを創出することを目指した。

その後平成 27 年には 1,700 万円の予算を掛けて測量を行い、平成 28 年には策定委員会を設けると共に、「米子城魅せる！プロジェクト事業」を展開し、市民をはじめ観光客等の来訪者に対して、米子城跡の魅力を更に広範囲にわたって PR し、整備に向けての周知を図り、関心を高め、後世に伝えていく意識の醸成に寄与する為、城跡を利活用した市民参加型イベント等を連続的に実施した。そして平成 29 年 3 月に保存活用計画を策定した。

計画策定の目標として、「史跡米子城址が有する多様な価値を明らかにし、次世代に継承する為の方向性を明示する」「史跡米子城址の保存を確実に果たし、更には観光振興や地域活性化にも寄与するよう、地域の誇りとするにふさわしい保存・活用・整備のあり方を明示する」の 2 つを掲げ、保存管理、整備活用、運営及び体制の 3 つの構造に分け、内容を整え、その後「米子城魅せる！プロジェクト 2017」など計画に基づく施策を展開している。



### [感想・岡崎市への反映]

市役所での研修の後、実際に米子城跡を案内して頂いたが、城跡に登り、ご説明頂いた 360 度パノラマ、標高 90m の「ちょうど良い高さ」から眺める市街地、また海、山の景色は壮観で格別だった。しかし市民にとってはその眺めも昔から当たり前にあるものとして、その価値をなかなか理解してもらえず、城跡の保存、活用の施策が遅々として進まなかったと言った話は大変興味深かった。そしてその市民意識をウォーク、ワークショップ、フォーラム等のソフト事業を繰り返し、醸成を図り、少しずつ、時間をかけて変えて行かれたその過程は、本市が現在、また今後進める事業にも大いに参考になる事例であった。